

ナイチンゲールと同じ五月十二日、私はこの世に正を受けました。しかし、病気をすることなく生きてきた私にとって、そんな名誉な誕生日とは裏腹に、看護という道には全く縁が無く、現役の学生時代には興味を持つ事ありませんでした。そんな私を、高校卒業から十五年後に看護学生としてこの道に導いてくれたのが、お二人の方との出会いでした。

お一人目は看護師の方で、祖父が末期がんと診断され、入院していた病院でお会いしました。あと一週間もつかという時期に再会した祖父は、とても痩せ、起き上がるのも難しい様子でしたが、病気を受け入れたその瞳は穏やかで、温かな愛情を私に向けてくれました。その五日後、意識が無くなったという連絡を受け、病院に向かうと、祖父は体を動かしてはいるものの、声を掛けても返事は無い状態でした。その時、看護師の方が私達に向かって、「生まれてくることも大変だけど、死んでいくこともやっぱり、人間にとっては大仕事なのよ」「どんな時にも命はやっぱり尊いものです」などの言葉を頂き、祖父にとって、もはや痛みは無いこと、ただ、体の置き所が無い感じがするのだと教えてくださいました。その言葉は衝撃的で、私が初めて「命」について考えた出来事でした。

それでも、看護という道を選ばなかった私の次の転機は、出産でした。三十一歳の時に息子を出産しました。出産後、体が重く動かなかった私に、助産師の方が一時間おきに声をかけてくださいました。夜中であっても、眠さも感じさせず、はつらつと私に声をかけてくださったことは、私にとって大きな安心でもありました。自分の出産で「命」の輝きを強烈に感じていた私は、その助産師さんの姿に、ふと、あの時に会った看護師さんの言葉を思い出しました。

「命」はいつも尊い。生まれて来るときも大変だけど、死ぬときだって大仕事。その教えが自分の中に改めて実感させられました。そのとき私は「命」の始まりと終わりにいつも優しく寄り添う職業である看護師になろう、と心に決めました。三十二歳で受験をしましたが失敗し、浪人して、三十三歳で念願の熊本大学の門をくぐりました。十五年前には興味の無かった世界が、今は自分の夢になり、実現しようとしています。短くはない十五年の遠回りですが、自分には必要な回り道だったと感じています。祖父が最期に教えてくれた命の尊さ、息子が教えてくれた命の輝きは、看護師さんや助産師さんの助けを借りて、私の中に強く伝わりました。これからは、私が、誰かに伝えていけるように、「命」の尊さ、輝きをいつも胸に抱いて、看護という道をひたむきに歩みたいと思います。